

## コロナ禍の子ども食堂の活動形態 連携先の種類との関連に着目して

植野航史

### はじめに（問題関心）

本稿は、愛知県の子ども食堂を対象としたアンケート調査と、子ども食堂への参加経験をもとに、子ども食堂の活動形態と連携のあり方について分析する。これにより、コロナ禍の愛知県の子ども食堂の活動状況と支援者とのつながりを明らかにすることを目的とする。

「子ども食堂」という名称は全国各地に広まりを見せている。子ども食堂数は年々増加傾向にあり、NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえによると、2020 年は少なくとも全国で 5080 箇所あり、2019 年の 3718 箇所と比較すると、1362 箇所増えている。また 2020 年 2 月以降のコロナ禍に限っても約 200 箇所増えている。生活困窮家庭の子どもの居場所作りを意識している子ども食堂が多いが、子どもやその保護者等の地域の人々に対して、低価格で栄養豊富な食事を提供し、食を通じて交流を図ることができる場として機能している。筆者がボランティアとして参加している愛知県内の子ども食堂を念頭に、子ども食堂の形はその数ほどあるといえる。要するに、多様性が子ども食堂の一つの特徴である。子ども食堂は、多世代交流、食育、子育て家族の交流など地域の交流拠点としての役割を担い、祭りや団欒を感じさせる。食を通じた交流で生まれる関係性から、子どもたちや参加者の声を知り、時には参加者の SOS を見つける場となっているのが子ども食堂である。様々な機能を持つ子ども食堂をサードプレイスなどの居場所とする人も少なくなく、子ども食堂に参加する人の目的も多様化している。また、子ども食堂は、つながりやご縁の関係が色濃く表れる活動である。参加者のみならず、子ども食堂の活動を支援し、協力する各個人や団体によるつながりも多く存在し、子ども食堂への理解が広まっている。

ところが、新型コロナウイルスの蔓延により、子ども食堂の機能の一つである食事の提供を必要とする人が増えた。しかし、子ども食堂は交流等により密を生み出してしまう活動であるため、感染リスクへの対策をとりながら、活動を行うことを余儀なくされている。コロナ禍の子ども食堂は独自の対応により、活動再開や継続に尽力している。筆者は、コロナ禍が子ども食堂活動に与えた影響、また、コロナ禍への子ども食堂の対応が、子ども食堂の活動をより多岐にわたる活動とするきっかけになったのではないかと考えている。また子ども食堂の活動に必要な人とのつながりが、多様化する活動を後押しし、コロナ禍の子ども食堂の運営においても重要な存在として関係していると考えている。

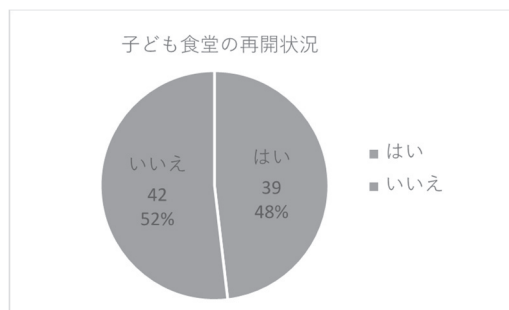
### 1 章 調査方法

今回の調査は、愛知県子ども食堂の運営者を対象にアンケート調査である。紙媒体と Google form での回答を可能とし、名古屋市 13 区、名古屋市外 28 市で活動する 81 の子ども食堂から回答を得ることができた。本稿では、以下の項目を中心に単純集計またはクロス集計を行った。

- ・ Q3 コロナ禍前から 11 月のこども食堂の活動状況
- ・ Q4 子ども食堂の再開状況（子ども食堂は屋内や屋外等の共食の場としてのみ）
- ・ Q9 子ども食堂の運営に連携している他機関・団体・個人と連携の内容

## 2章 分析結果

### 2.1.2020年11月から2021年1月にかけて愛知県子ども食堂の開催状況

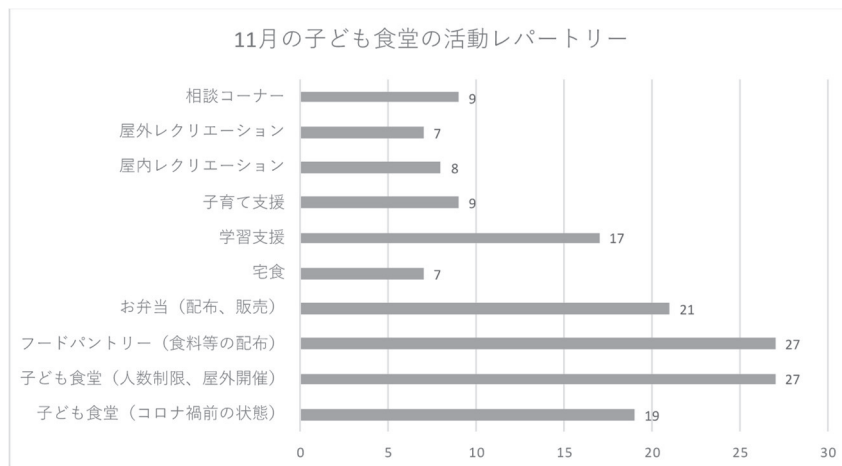


【図1】子ども食堂の再開状況 (N=81)

【図1】より、39箇所の子どもの食堂が再開しており、42箇所の子どもの食堂が再開できていないことが明らかとなった。割合としてはおおよそ半数ずつになったものの、再開できていない子どもの食堂の方が僅かに多いことがわかる。しかし、この結果はあくまで概略としか捉えることができていない。

### 2.2 コロナ禍の子どもの食堂の活動

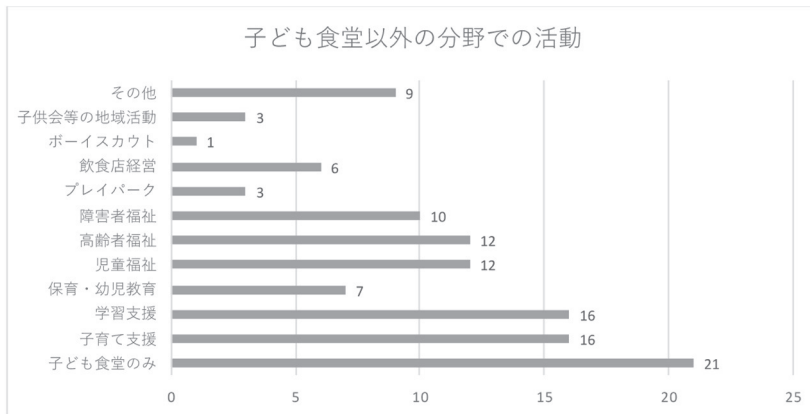
子どもの食堂の活動の種類をレポートリーと表現し述べていく。2020年11月時点での子どもの食堂の活動レポートリーについては以下の【図2】である。



【図2】11月での子どもの食堂の活動レポートリー (N=81)

「子ども食堂」の活動を除き、最も多い活動はフードパントリーであった。次いでお弁当の配布・販売の活動が多く、学習支援を行っている子どもの食堂も17箇所存在している。全体としては、子ども食堂とは別で食に関する活動に取り組む子どもの食堂が多い結果となった。先述したフードパントリーとは、企業や農家、個人から寄付される食料品を無料でひとり親家庭や生活困窮者、地域住民に配布する活動であり、コロナ禍の多くの子ども食堂が新たに取り組み始めた活動である。

ここで昨年度、当ゼミで行った子ども食堂に関するアンケートによると、子ども食堂以外の分野での活動状況項目は以下の【図3】である。

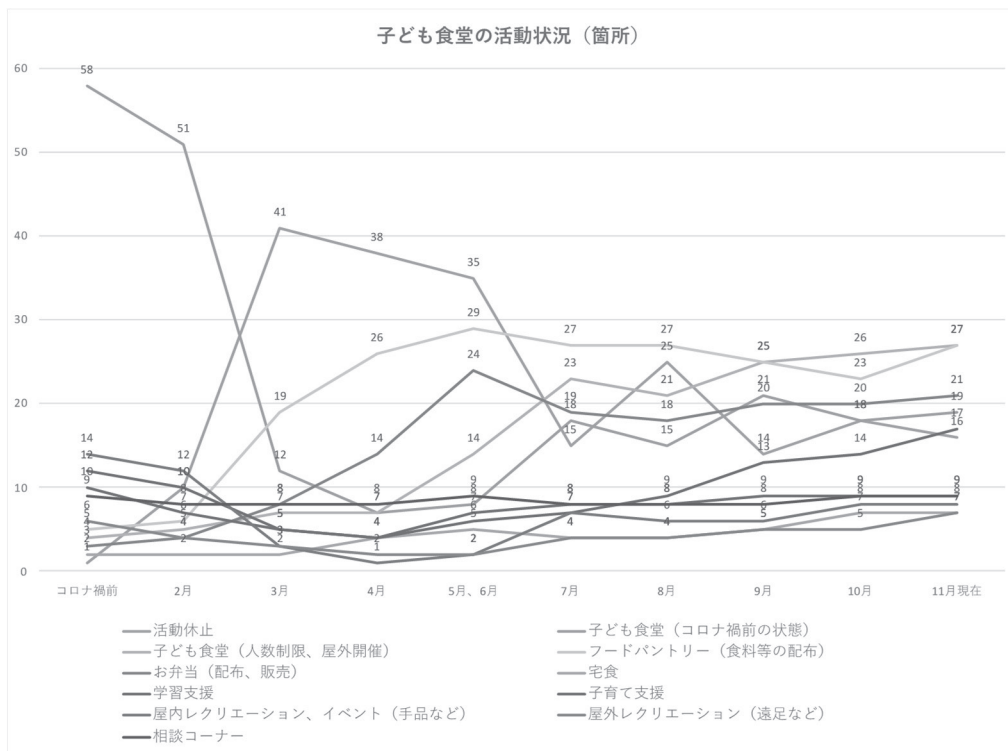


【図3】子ども食堂以外の分野での活動 (N=59)

子ども食堂のみの活動が最も多く、次いで子育て支援と学習支援が多い結果となっている。食に関する活動は子ども食堂のみで、教育や福祉支援、居場所作りの活動に取り組む子ども食堂が多いことがわかる。

【図2】と【図3】より、子ども食堂の活動レポートリーに変化が起きていることがわかる。

次に、コロナ禍前から11月までの子ども食堂の活動状況の変化の推移を見ていく。なお、活動レポートリーの他に活動休止の項目を追加したグラフが以下の【図4】である。

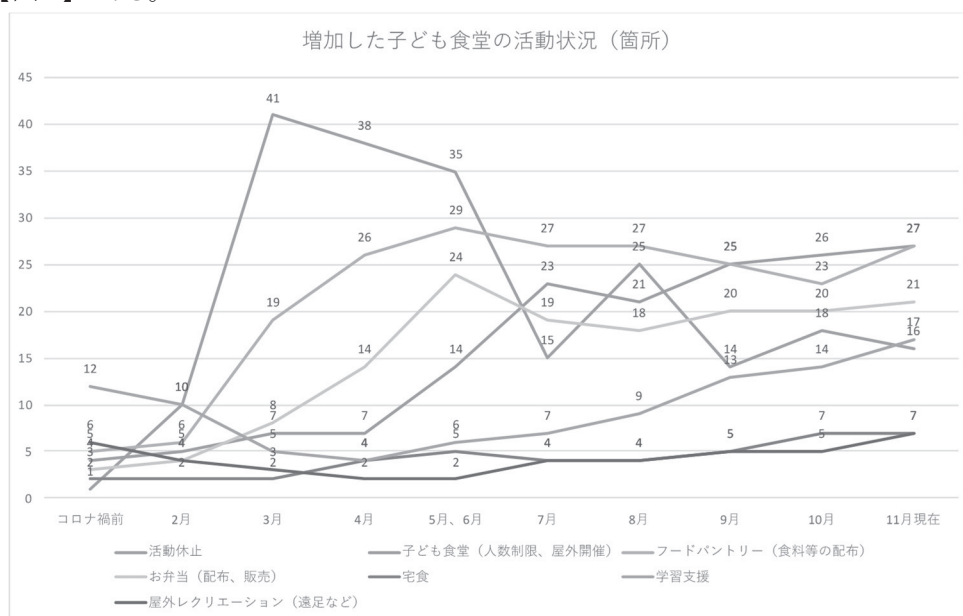


【図4】子ども食堂の活動状況の変化 (N=81)

コロナ禍の子ども食堂に影響を及ぼした主な出来事として、2月27日に全国の小中高校に臨時休校を要請(期間は3月2日から春休みに入るまで)、4月16日に全国に緊急事態宣言を発

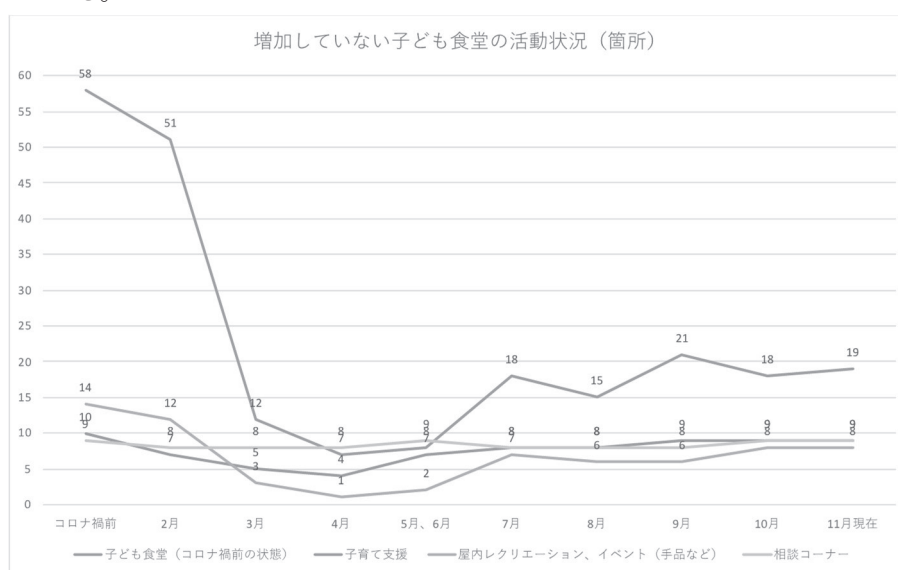
令(期間は5月6日までで、愛知県は特別警戒都道府県に位置付け)、5月4日緊急事態宣言の延長、5月14日緊急事態宣言解除地域に愛知県が含まれることが挙げられる。主な出来事が起きた時期は推移にも影響を及ぼしている。

また、【図4】の活動状況別の活動レパトリーの増減に関して、コロナ禍前と11月時点と比較し、コロナ禍前の活動数が11月時点に増加した項目のグラフが以下の【図5】、増加していないグラフが【図6】である。



【図5】増加した子ども食堂の活動状況

活動休止、子ども食堂(人数制限、屋外開催)、フードパントリー、お弁当の項目は、箇所数が大きく増加し、コロナ禍前と比較した際の増加の幅も大きい。また学習支援は4月時と比べると11月時は大きく増加していることがわかる。宅食や屋内レクリエーションも僅かだが、活動する子ども食堂が増加している。



【図6】増加していない子ども食堂の活動状況

子ども食堂(コロナ禍前の状態)の項目の活動箇所数は2月に大きく減少し、減少幅も大きい。子育て支援や屋内レクリエーションも減少幅は大きくないものの減少し、相談コーナーに関しては、僅かな増減はあるものの、11月時点ではコロナ禍前の活動箇所数と同数であった。

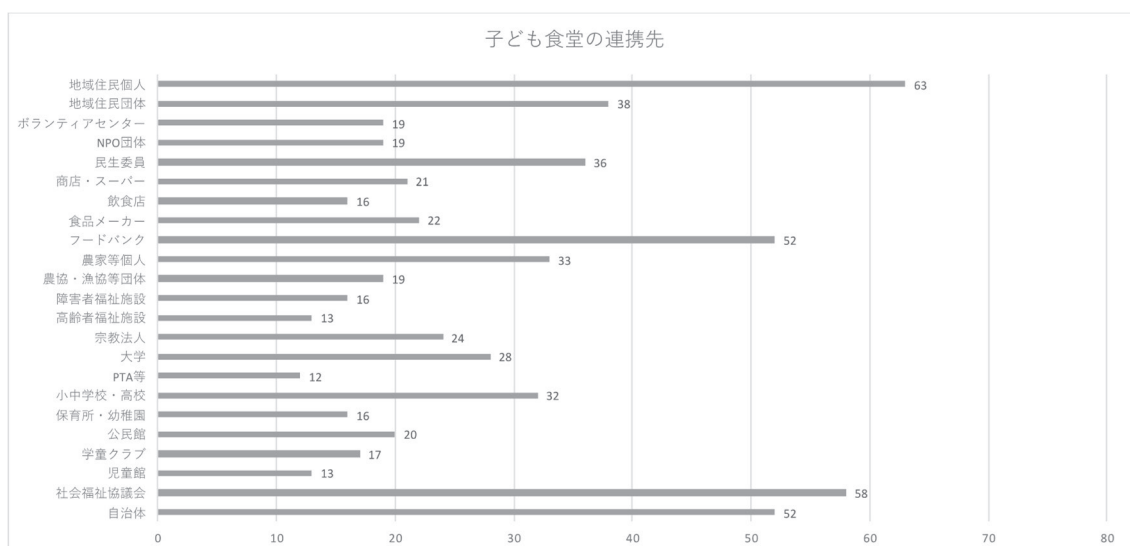
### 2.3.子ども食堂のつながり

子ども食堂の運営に連携している他機関・団体・個人と連携の内容について、各子ども食堂が何種類の連携をしているのかを表すものが以下【表1】である。

連携の種類数	0箇所	1箇所	2箇所	3箇所	4箇所	5箇所	6箇所	7箇所	8箇所	9箇所	10箇所
子ども食堂数	2	2	5	4	7	7	4	8	9	8	5
連携の種類数	11箇所	12箇所	13箇所	14箇所	15箇所	16箇所	17箇所	18箇所	19箇所	20箇所	21箇所
子ども食堂数	6	1	2	6	1	0	1	2	0	0	0
連携の種類数	22箇所	23箇所									
子ども食堂数	1	0									

【表1】(N=81)

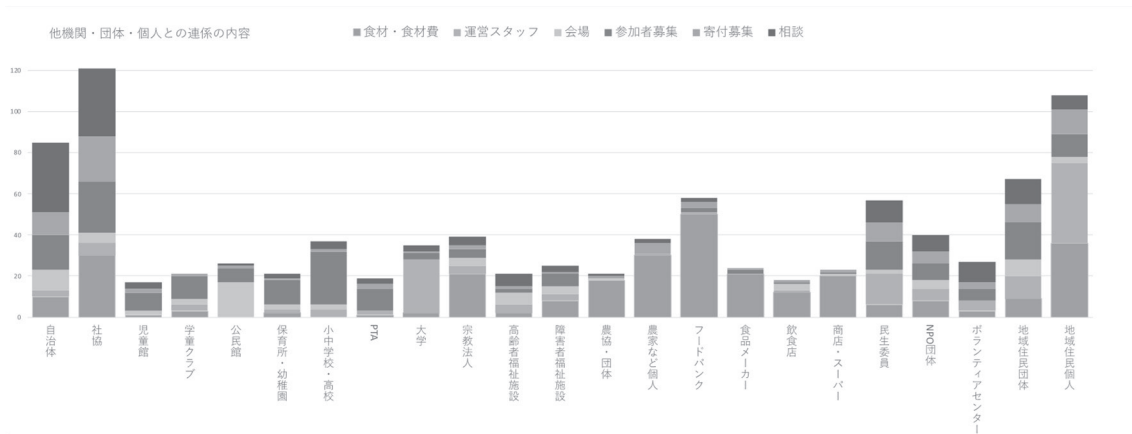
どの種類の連携先とも連携を持たない子ども食堂は2箇所であり、23種類すべての連携先と連携している子ども食堂は0箇所であった。全体の連携の種類数の平均値は7.8で最頻値は8であった。では、具体的にどのような団体や個人と連携し、つながりを築いているのか見ていく。



【図7】子ども食堂の連携先(N=81)

地域住民(個人)と連携している子ども食堂が63箇所と最も多く、次いで社会福祉協議会が58箇所、自治体とフードバンクとの連携が52箇所という結果となった。

次に、連携先とどのような内容の連携をしているのかが、以下の【図8】である。

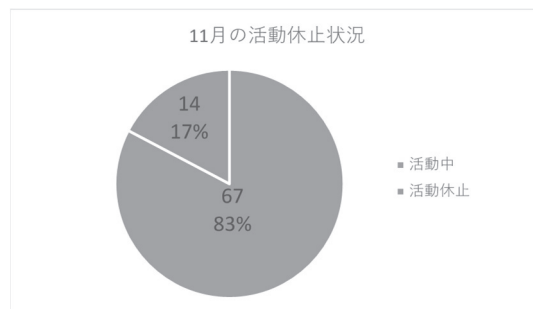


【図 8】連携先による連携内容 (N=81)

連携先の特徴に応じて連携の内容を限定している子ども食堂が多く、例えば、フードバンクや農協・漁協など食料品を得意として扱う連携先には食材・食材費の支援先とし、公民館には会場の提供として連携していることがわかる。しかし、自治体や社会福祉協議会、地域住民団体等は、様々な内容の連携先として連携を持つ子ども食堂が多い。

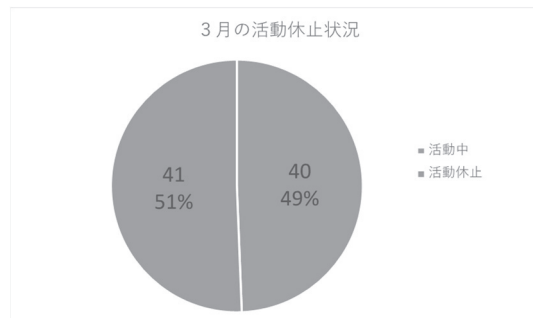
#### 2.4.活動の種類と連携種数の関係

【図 4】のデータを 11 月の活動休止のみに注目したものが以下のグラフである。



【図 9】11 月の活動休止状況 (N=81)

全体の 17%の子ども食堂が活動を休止しており、83%は何らかの活動を行っていることがわかる結果となった。ちなみに、2 月末に起きた全国の小中学校への休校要請を経て、最も子ども食堂の活動休止数が多い 3 月の活動休止状況が以下のグラフである。



【図 10】3 月の活動休止状況 (N=81)

3月の活動休止状況はおよそ半数ずつになっている。【図9】と比較すると、11月の活動休止している子ども食堂数は、3月時点に比べて1/3になっている。上記に記した【図9】の11月の活動休止状況と【表1】の各子ども食堂の連携種数のクロス集計した結果が以下の【表2】である。

		11月の活動休止状況				合計	
		活動中		活動休止			
連携種数	種類	度数		度数		度数	
	0	1	50.00%	1	50.00%	2	100.00%
	1		0.00%	2	100.00%	2	100.00%
	2	2	50.00%	2	50.00%	4	100.00%
	3	3	75.00%	1	25.00%	4	100.00%
	4	5	71.43%	2	28.57%	7	100.00%
	5	5	71.43%	2	28.57%	7	100.00%
	6	5	83.33%	1	16.67%	6	100.00%
	7	6	100.00%		0.00%	6	100.00%
	8	7	100.00%		0.00%	7	100.00%
	9	3	75.00%	1	25.00%	4	100.00%
	10	11	91.67%	1	8.33%	12	100.00%
	11	3	75.00%	1	25.00%	4	100.00%
	12	2	100.00%		0.00%	2	100.00%
	14	7	100.00%		0.00%	7	100.00%
	15	3	100.00%		0.00%	3	100.00%
	17	1	100.00%		0.00%	1	100.00%
	18	1	100.00%		0.00%	1	100.00%
	22	2	100.00%		0.00%	2	100.00%
合計		67	82.72%	14	17.28%	81	100.00%

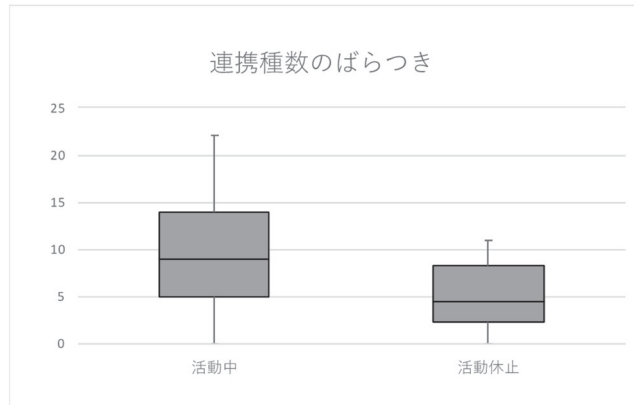
【表2】11月の活動休止状況と子ども食堂の連携種数のクロス集計(N=81)

このクロス集計をもとに11月に活動中の子ども食堂と活動休止している子ども食堂の連携種数の平均値、中央値、最頻値、分散、標準偏差を計算したものが以下の【表3】、連携種数のばらつきを表したものが以下の【図11】である。

		連携種数				
		平均値	中央値	最頻値	分散	標準偏差
11月の活動休止状況	活動中	8.99	8	10	35.5363322	5.9612358
	活動休止	4.50	4	2	13.29	3.6455452

【表3】連携種数の平均値、中央値、最頻値、分散、標準偏差(N=81)

【表1】で述べた、全体の連携の種類数の平均値7.8、最頻値は8と比較すると、活動休止している子ども食堂の平均値は4.50、最頻値は2と値の差が大きいことがわかる。【表3】の11月の活動休止状況別に見ると、連携種数にも差があることがわかる。平均値では、11月に活動している子ども食堂は8.99種類と連携しているのに対し、活動休止している子ども食堂は4.5種類との連携である。また最頻値では、活動中の子ども食堂が10種類との連携が最も多いのに対し、活動休止している子ども食堂は2種類の連携が最も多い。

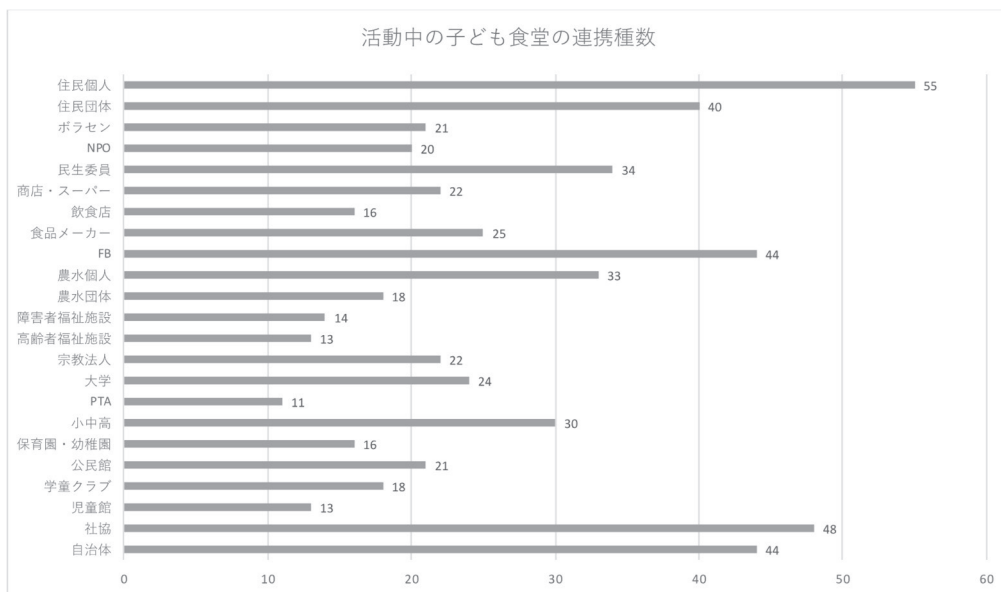


【図 11】連携種数のばらつき (N=81)

上記の【図 11】より連携種数のばらつきをみると、活動中は散らばりが大きく、四分位範囲も大きいですが、活動休止は散らばりが小さく、四分位範囲も小さいことがわかる。また最小値は活動中、活動休止共に同値であった。散らばりに関しては、【表 3】の分散と標準偏差からも数字として読み取ることができる。

#### 2.5.11 月の活動状況による連携種数の違い

11 月時点で何らかの活動を行っている子ども食堂の方が全体的な値が大きい。【図 7】より分析した全体の子ども食堂がどのような連携先と連携しているのかを、11 月時点のそれぞれの活動状況別(活動中と活動休止)に見ていく。

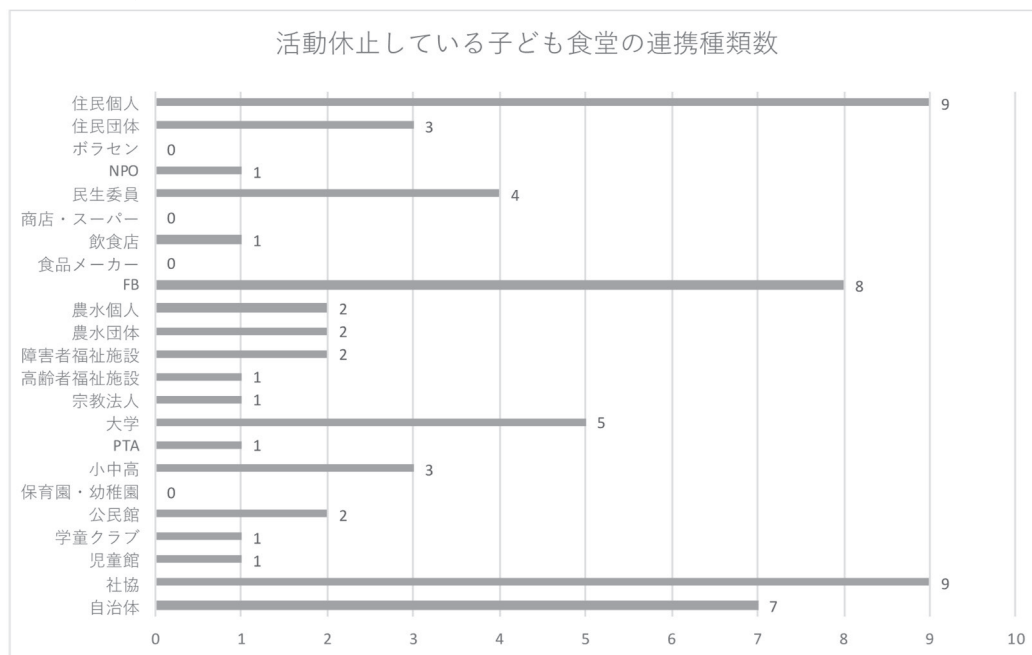


【図 12】活動中の子ども食堂の連携種数 (N=67)

活動中の子ども食堂の連携種類数で最も多い連携先は、地域住民の 55 箇所である。次いで社協の 48 箇所、自治体、フードバンクの 44 箇所である。また住民団体の 40 箇所や民生委員の 34 箇所、農水個人の 33 箇所も、活動中の子ども食堂数 67 箇所のおよそ半数が連携していることが



わかる。最も連携が少ないものは、PTA であった。



【図 13】活動休止している子ども食堂の連携種類数 (N=14)

活動休止している子ども食堂の連携種類数で最も多い連携先は、住民個人と社協の 9 箇所である。次いでフードバンクの 8 箇所、自治体の 7 箇所である。【図 12】の活動中の子ども食堂と比較すると、多い連携先の種類はどちらも変わりはないものの、多い連携先の住民個人、社協、フードバンク、自治体以外の連携先と連携している子ども食堂が少ないのが活動休止している子ども食堂である。

### 3章 子ども食堂参加経験及び体験談

2 章までの分析を踏まえ、筆者が継続して参加している子ども食堂の活動の様子と体験談を述べていく。

この子ども食堂は、筆者が 2 年ほど前から参加している子ども食堂である。この子ども食堂が活動する地域では、新型コロナウイルス感染者が早くに出始め、早めに活動休止をせざるを得なかった。しかし、活動再開への行動も一早く行い、従来の活動形態から試行錯誤や努力に努めることで、柔軟な対応や対策を行ってきた。例えば、時間帯による参加者の予約制と入れ替え制、会場の入り口に新たに洗面台、会場内に空気清浄機の設置、蛇口の水道栓や手洗い石鹸の自動化、同一方向を向いての食事体制、食事の時以外のマスク着用、食べ終わったら、会話を控え、帰宅することを呼びかけるなど、細やかな対策が施されている。

また学校休校や給食の休止など、その時々状況に応じて活動内容も変えており、例えば、お弁当の販売やフードパントリーの実施、本の貸し出し、手作りマスクの販売など様々な活動を行ってきた。現在では子育て講座やいけ花親子教室、お勉強会なども開催しており、活動の幅は今も広がっている。

先述のように、この子ども食堂の活動が柔軟に変化し、多角的な活動を行えているのには、子ども食堂を支える支援者の存在と支援者との上手な付き合い方が関係しているのではないかと考え

る。この子ども食堂では、毎回手書きでイラスト付きの看板が入りに設置されており、当日のメニューや寄付でいただいた食材が書かれている。寄付は、お米や野菜、お菓子など様々であり、大量の野菜をいただくこともある。多くの食材や寄付は大変ありがたいものの、一度にすべてを使い切ることが難しい。しかし、この子ども食堂に寄付をしてくださる方の中には、どのような形でもいいのでどうぞとおっしゃる方もいる。それだけ、この子ども食堂の活動に協力的で存在が受け入れられている証拠である。また、この子ども食堂の活動にはボランティアスタッフの存在が大きく、多くの地域の方がお手伝いに参加されている。ボランティアスタッフが足りない時は、助け補い合い、多い時は、参加を譲り合うといった様子が見受けられる。様々なキャリアを積んでいるボランティアスタッフの存在により、自ずと役割を意識した行動から、共助を感じる場面が多い。このような支援者やボランティアスタッフの存在は子ども食堂の運営には欠かせない基盤とも言える。子ども食堂関係者との関係性に貸し借りや勝ち負けが存在していないことが十分に読み取れる。子ども食堂の活動は相互扶助によって成り立っているのだ。

また、コロナ禍では、子ども食堂への参加にあたり、守るべきお願いやルールが増えている。遵守に対して嫌がる人が出てきてもおかしくない中、趣旨に理解を示し、感染対策の徹底に協力している。それは対策を怠り、子ども食堂から感染者を出してはならない、子ども食堂の活動を停止しては困るといった想いの集団意識とも捉えられる。「黙食」を呼びかける飲食店があるように、おしゃべりを制限する食事は飛沫感染を防ぐのに効果的であるが、交流や意思疎通を図るという面においては、子ども食堂の醍醐味が機能しなくなってしまう恐れがある。短時間の食事や会話でも行うことができるコミュニケーション案や交流方法がコロナ禍の子ども食堂に共通する課題ともいえる。

## おわりに

本稿は、新型コロナウイルスのような危機やトラブルが起きた際に、子ども食堂が活動し、機能し続けるためには、複数の種類（ジャンル）との連携によるつながりを生み出すことが求められることを明らかにした。

特定の連携先のみとの連携では、幅広い支援は難しく、特定の連携先のみを頼りとすることで依存してしまう可能性がある。熊谷晋一郎は、自立とは依存先を増やすことであると指摘する。薄く依存することで、つながりのすそ野を広げると述べている。また、何か特定のものだけに依存している状態は、それを失う不安や怖れと表裏一体である。その怖れに対してほかの依存先を増やすという発想の転換ができないと、いま依存しているものを失わないために、それ自体をさらに依存するという悪循環に陥ってしまうのだと述べている。

こうした知見は、子ども食堂に当てはまるのではないかと、筆者は考えている。特定のみの連携先を依存先とし、支援や協力を集中してお願いするのではなく、分散させることで、特定の連携先に依存せず、幅広い交友関係のもと伸び伸びと活動を行うことができる。現在の環境や活動、考え方や想いに固執しすぎず、新たな刺激や経験、出会いを求めることで、新たな活動や活動の成熟を図ることができる。

また子ども食堂内で新型コロナ感染者を出すことや危機的状況に陥った場合、自己責任や自業自得と受け止め、受け取られる風潮があるが、依存先を増やしておくことで、そのリスクは最小限に抑えることが可能である。リスクが起きた際も、そのリスクに対する解決策や改善点も様々な連携先の視点から考え、取り入れることができる。日本人は、謙虚な生き物であるが、謙虚と遠慮は意味が異なる。迷惑をかけたくないからと周囲に助けを求めず、

抱え込むのは自己に依存している。現状を抜け出せるかどうかは、どれだけ周囲と連携しているのか、人を頼りにできるか、依存先となる連携先を持っているのかも関係してくる。自助と共助のバランスが大切なのである。

また【図8】から読み取れるように、連携先に応じて得意不得意な支援や活動も存在する。子ども食堂を支援する団体や個人の種類の多さは、ニーズの声を拾うためのアンテナを広げることとなり、活動の早期着手や、実現へと向かうスピードにも関係する。連携先の手広さが、参加者のSOSサインに気づいた際の、他の支援機関へのスムーズな動線の確保にも繋げることができる。限られた連携では支援の選択肢も狭まってしまう。広く緩いつながりは人生を豊かにし、そういったつながりの可能性は、子ども食堂が危機に瀕した時の今後の選択としても解釈できる。

一方で、繋がりを求めるがあまり、ただ多くの団体や個人と連携を取ればよいというわけでもない。関係者や周囲の声が増えるほど、活動への目や期待も増え、プレッシャーとなる恐れもある。子ども食堂は何でも屋ではなく、都合の良いボランティア活動となってはならない。各子ども食堂のやりたいことや叶えたいこと、尊重している想いを実現するために必要な支援を、どのような団体・個人の協力を経て成し遂げるのかを考え、相互に尊重し合うことができる関係性を構築していくことが重要である。子ども食堂の関係性は一方通行ではなく双方向であり、その関係性に強制的な互酬性があるわけではない。「困ったときはお互い様」の考えが上手な付き合い方にも求められる。この考えは社会史では、ある地域社会や社会集団にみられる人と人との結合関係、あるいは「おつきあい」の様式をソシアビリテという。食によるソシアビリテが子ども食堂の活動の核である。

近年、血縁や地縁、社縁など人との繋がりや関係の希薄化が進み、孤立や孤独になる無縁社会が深刻な問題とされている。家族形態の変化や多様な考え方の尊重により、社会が変化する影響は食事にも起きている。農水省がまとめた令和元年度『食育白書』によると、学校による食育の推進は学校を核とし、家庭を巻き込んだ食育への取り組みが行われている。しかし、コロナ禍は学校給食の休止や授業時間の短縮等により、学校内で集団が一度に食事をする機会が減ってしまった。共食の場が減ることで孤食や孤立をもたらす恐れがある。その影響も鑑みると、食を通して交流する場や機会を求め、子ども食堂に足を運ぶ人が更に増加するのではないかと予想できる。居場所やつながりを求める人の増加と様々なニーズをどのように受け入れていくのが子ども食堂に問われてくる。

では、どのようにして子ども食堂らしくつながり、活動を行うのか。案として、相談に力を入れることを挙げたい。相談を活動として取り入れている子ども食堂や個人間で相談を受けている子ども食堂も多い。単に相談と言っても、解決を求めすぎた相談ではなく、共感や同意、発見を求めた世間話のようなコミュニケーション的相談である。傾聴力や面倒見の良さは多くの子ども食堂に共通している要素であり、相談に対し、ただ解決策を提示するのではなく、相手の状況や想いを知り、時間をかけることで相手の気持ちに丁寧に寄り添うこと。それは個人に対しても団体に対しても同様であり、企業や自治体ではなく民間のボランティアらしさが見える一面でもある。時間をかけ、緩い雰囲気話し合うこともまた新たな気付きや考えに辿り着く手段である。悩みや想いを打ち合えることは、容易ではなく、信頼関係が無いとできない。そのため話しやすい姿勢や雰囲気、環境を整えることから信頼関係を築くことが良いのではないだろうか。緩く多様なつながりへの依存こそが強固な連携を

生み出し、子ども食堂の発展に大きな影響をもたらすのではないだろうか。

コロナ禍は子ども食堂にとって大きな変化の時期でもある。活動状況が様変わりする中、支援を必要とする人、支援が必要な人が増え、今まで見え隠れしていた支援の手を差し伸べたい人々の存在が明るみになるなど、子ども食堂の存在意義が高まる場面に直面している。また子ども食堂の特色や醍醐味も機能することが困難となり、子ども食堂への認知や広がりもまた、思わぬ形での周知や誤った内容の発信なども問題視され、頭を悩ませる。度重なる試練や苦悩から各々の不安や懸念材料も募るばかりではないかと思う。しかし、子ども食堂に明確な定義が無いように、子ども食堂は子ども食堂がやりたいことを賛同してくれる人々と共に活動を行うことが望ましいと思う。子ども食堂は民間のボランティアとして、しがらみに囚われず柔軟に活動を行っていただきたい。

また、筆者や当ゼミ生が述べた報告書や、論文が一人でも多くの子ども食堂関係者の方に読まれ、子ども食堂に対する何らかの活動や行動のきっかけとなることを心より願っている。

#### 【参考文献・資料】

NPO 法人全国子ども食堂支援センター むすびえ 子ども食堂全国箇所数調査 2020 結果のポイント閲覧日 2021年2月2日

NPO 法人全国子ども食堂支援センターむすびえ 第一次中期計画 閲覧日 2021年2月4日  
朝日新聞 2020年4月22日給食なし閲覧日 2021年2月2日

NHK 特設サイト 新型コロナウイルス時系列ニュース閲覧日 2021年2月2日

Yahoo ニュース「黙食にご協力ください」閲覧日 2021年2月5日

熊谷伸一郎,2020,『当事者研究—等身大の<わたし>の発見と回復』岩波書店

成元哲・牛島佳代,2020,「食卓をめぐるソシアビリテの誕生と変容」

農林水産省,令和元年度『食育白書』